

此

院  
行

全



自序

生死抑何

不 思 死 者 即 狂

不 知 死 者 即 愚

唯 雖 死 可 則 足

嗚呼浴々タル世人ノ薄志弱行ハ余ヲシテ視ルニ

忍ビザラシム蓋シ思フニ此レ人生行爲ノ標準ニ

味不定ナレバナリ其ノ今日教育道德ノ標準トナ





スモノヲ視ルニ強ヒテ之ヲ遠キニ求メ徒ラニ之  
ヲ不能ノ難キニ置クニ非ラズムバ或ハ唯ダニ一  
二手段ノ末ヲ教ユルノミナレバナリ吾レ此ニ歎  
アリ此書ヲ公ニシテ人生行爲ノ大標準ヲ確定シ  
以テ世人ノ薄志弱ヲ匡正スルニ補アラントス  
余ノ所謂人生ノ大道即行爲ノ唯一ノ大標準トハ  
曰ク雖死可ノ三字ナリ世人自カラ已ニ顧ミテ雖  
死可ノ決心ニ由リテ社會ニ處スレバ即チ足矣

人生ノ行爲此決心ヲ以テ進マバ又タ如何ニシテ  
薄志弱行ニ陥ラムヤ抑モ仁義ヲ以テ人生處世ノ  
標準トナスハ此レ僅カニ手段ノ一二ヲ捕ヘテ直  
チニ人生ノ大道トナサムトセシ先人ノ誤謬ナリ  
世人ハ再ダヒ手段ノ末ニ注目スルヲ止メヨ一進  
一退常ニ雖死可の大望ヲ以テ行働セヨ仁義ヲ説  
クハ手段ヲ説明スルノ老婆心ニ起レルナリ

明治卅年春四月

天 眞 生

目次

- 一、 死遂ニ免カル可ラズ、
- 一、 然ラバ之ヲ願ミズシテ可ナルカ、
- 一、 吾レ何レニカ死ヲ知ラム、
- 一、 人類モ蟲蟻モ生死ハ一ナリ、
- 一、 死ハ死ニヨリテ知ルヲ得ズ、
- 一、 不知生焉知死、



一、死遂に免かる可からず

世無萬年之天子、國無不朽之雄國、今赴々百万猛兵、

百年之後皆爲枯骨、誰又與余生存此世、

二十世紀の文明將さに東天に顯はれむとして、世は今まや無機体なる石炭と鐵との跋扈時代となれり、人も又た宛然たる無機体の如く、火輪轉じ、氣笛轟き、雲際に聳ゆる烟突は黒煙を吐き、熱繁たる人生社會は、喧々囂々日となく夜となく一大渦中に奔騰せり、人は誰れか此間に死を知らむ、然りと雖も、無情の殺氣を帯び、悽慘たる死の冷風は、始めより絶へず襲ひ來りて、瞬時も止まず、彼の熱繁は暫らく人生をして惑はしむるのみ

美酒陶然たるの間、暫らく人は生死の外にありて自得す、座右美人を視



るの間、暫らく神魂生死の外に超俗す、高樓盃を傾け放歌豪飲古今を談ずるの間、天下の英雄眼中にあり、然も冷々たる陰風、遂に如此にして、能く幾月幾年更らに幾十年の久しきをして、人生を死生の外に超脱活歩せしむるあらむや、金殿玉樓の歌舞美酒は一時の迷夢なり、死の冷風、慄然として膚に逼まり、夢醒むれば萬事熄むの痛寒、身骨に徹するなり、死始めより一刻の間一寸の隙も、人身を犯さざるなきなり、唯だ暫らく自から思はざるのみ、噫、死は人生の影の如し、人は走る可く、して影遂に離るべからざるなり、

門松や冥土の旅の一里塚

凡そ始めあるもの必らず終あり、死は人生と離る可からざる常理なり、死の前には王侯なく將相なく、富貴榮爵の別なし、等しく枯骨に委し、秋露と化するのみ、

生れては終に死ぬてふ事のみぞ

定めなき世に定有ける

嗚呼、千思萬慮、惘然として憂ひ、憂ひて而も死を免かるゝなし、死は絶へず、人生を追逼して止まざるなり、

然則吾れ感へるか、前途花の如き青年、今まや春雨を得て、天下に一呼せんとするの身も、遂に一たび斷而死を免かれざるか、吾れ此れを疑はむとして、愈々信むするの外なきなり、噫、此事實を如何せむ、到是吾れ斷ず、死の來る可きを思はざるは、狂に非らざれば迷なり、



一、然則之れを顧みずして可なるか、

生 死 行

生死不可知、生之前自那處來、死之後復何所之、我欣人之生、未知吾之生、我悲人之死、未驗吾之死、世人多說生死之苦、應知非是實踐語、浮世如一夢、譬喻未必中、夢醒記夢夢亦真、死去誰能辨死前、商參無會期、生死不同時、嗚呼惜生亦愚、畏死亦愚、死乃到時吾既無

死乃到時吾既無とは吾れ之を知る、生之前自那處來、死之後復何所之、吾れ又た之れと感と同ふす、然も吾れを以て視るに、生は欣ぶべし、是れ英雄偉人の顯はるゝ門出なればなり、現世は英雄偉人の活劇場なり、焉むぞして一夢の如けむ、無我寂滅にして己まじや、吾れ遂に死に對して、如

此漠々として浮沈するを得ざるなり、死は現世に於ける事業の終熄なり、苟遠大の志を抱きて、自ら死乃到時吾既無と吟じて甘むするを得むや、余は十年百年未來永遠の後を思ふて未だ足らざるなり、空漠たる目的の道は一步も生に安むして進む能はざるなり、思慮なき一日も徒爾に過すは、余の秩序的腦髓の到底甘むして堪ゆる所に非らず、吾斷而云ふ功名志望を遂ぐるを得るの生涯は唯一なり、限ありと、此限ある命を以て、限りなき遠大の功名を遂げむとす、豈勇猛突進せざるを得むや、如此にして、死は造次頓沛の間も余の念頭より去らざるなり、世人往々生死を口にすることを耻づと、吾れ其の無鐵砲に驚かざるを得ざるなり、蓋如此訓言は、封建時代に於ける一諸侯一主人の爲めに、忠義に殉せしめむとするの盲從的訓戒に過ぎざるなり、到底今日の文化に伴はざる舊思想のみ、世人は微笑せり、命有りての物種と、噫、人生の大道は、今まや、何



所ぞ、

惜哉吾れ今ま鄙才の一學生にして、且朝夕學事に逐はれ、深く思想に耽る暇なく、爲に死に對して哲理の蘊奥を探る能はず、否な自から哲理の不知を悦ぶに非らざるも、方今宇内の形勢邦家の前途は吾子の手腕を要すると急にして、況んや吾れの氣質として語詞の末を以て論するの迂なるに堪へず、又暫らく哲理を省みるの暇なきを悲なり、雖然未だ以て死乃、到時吾既無と呼びて、死を自暴自棄するに至りては、到底余輩の瞑目する能はざる所なり、死は蓋し萬人無差別の極に非らずや、天は有爲青年に對するも、目に一丁字なき愚夫愚婦と毫も撰ぶ所なく、憐む可く後世に成名の美なくして埋没せしむるか、噫、吾れ死の何むが爲に非らず來るやを知るなし、死何にが爲にか存する、死は事業の熄む時に非らずや、天何むぞ調和を計りて英雄をして不死の道を得せしめざるか、

一、 吾れ何れにか死を知らむ、

同進の友と書を携へて、學堂に昇り得々の色あるも、運動場裏に勝敗を競ふの快を試むるも、櫻花爛熳たる墨流に「ボートレース」の壯を演ずるも、未だ嘗て此疑念を排して、所謂眞如の光明を得むと務むるの念慮は一日も離れざるなり、

因縁宿世の説は功名内に燃ゆるが如き、余の腦裏に何等の精明を興ふるなし、死は依然として畏る可き死なり、万事を熄ましむるなり、物質不滅の哲理は、他日一大希望を施さむと期するの余を以て、豈に俗流の儕輩と混視するなきか、死は依然として畏る可きなり、余の功名的將來と相容れざるなり、

死は天國に導くなり、如意圓滿の新世界は彼土にあり、とは西教の論す



處なりと雖も、願はくは余をして功名利達を遂げしめて後ち、天國に導かれよ、余は現に此に既に生を有するなり、此生を如何せむ、死遂に未だ何むが爲めなるかを解する能はざるなり、彼の氣概なく奮勵の勇なき幾多の蒼輩は、或は其死を以て自暴自棄となすもあらむ或は其死に自屈するもあらむ、雖然余は到底現世の生存を以て、自暴自棄となす能はざるなり、死に自屈する能はざるなり、余は明治聖明の世に生まれ功名其器に従ふて博し得可きの快天地を悦ぶと興もに、彼の死を嘆ずるなり」

然るに、今まや教育は枝葉の末を教ゆるなり、世人は徒らに喧囂たるなり、衣食に奔命するなり、富人は己れの富に迷ふて暫らく自得の色あるのみ、彼の名望家と稱ばるゝの輩は、皆なく多くは此れ騎虎の勢に驅られ、己れを貴ぶ所の世人の愚なるを知らずして、自から賢なりと慢ずる

の愚なり、試みに問へ、彼等は何むが故に己れに名望なかる可からざるの自任なきなり

噫、教を問はむとするも、四隣の人々如此し、固より語るに足らざるなり、吾が雄志を知るなし、即ち去つて功名に求むるあらむとし、此れを輝々たる旭日に求め、或は之れを怒濤蒼波に考へ、或は月明に歩して原野荒墳に探りしも、遂に此等の意識なくして存在せるものは、余の希望と調和するなく、毫も余をして死を畏るゝの念を悟脱せしむるなし、三たび轉じて、或は之れを歴史に尋ね、或は之れを偉人英雄の言行に求め、或は之れを砲煙彈雨の戦記に顧み、或は所謂天理の妙を啓くとす、の詩人の名句に求め、更らに進むて道路を馳走するの牛馬は、何むが故に生を現世に寄するか、無邪氣なる子女の熙々として戯るゝは如何にと思ひ、或は蒸氣轟々として耳目を眩せしむるの工場に省み、遂に和氣



満々たる花下の宴に、糸竹洋たる音楽の會に、曰く何、曰く何、如此にして人の敬する所、人の樂しむ所、人の勞する所、人の歌ふ所、人の愛する所、人の喜ぶ所、人の驅る所、人の悲む所、人の畏るゝ所、事々物々一として余が念慮を煩はさざるはなく、然も遂に得る所なし、噫、必竟彼等の輩は何むが爲めにか、喜怒哀樂の狀ある、彼等の行爲は單に Sympathetic nerve の反動のみか、彼等は生存の終局なる死を如何むせむとかするものぞ、吾れ遂ひに之れを知ると得ざるなり、余は彼等の死を以て、余が死を畏るゝの情と一致する能はざるなり、蓋し彼等の行爲には始終一貫の希望なく、思想に始めなきが故に、又た死によりて終らしめらるゝ、恐れなきか、噫、迷焉、夫は何むが故に、意識なき萬事熄むの死を以て、前途多望なる青年の將來を蔽ふものぞ、

嗚呼吾が千思萬慮は、未だ何ぞが故に此勳かす可からざる事實の眞理を觀す破る能はざるか、吾が千思萬慮未だ足らざるものか、吾れ此れが教を、先進の士に乞はんとして得ず、「ネーチュア」に探らむとして得ず、更らに人々喜怒哀樂する所に求めむとして、毫も得る所なし、吾れ更らに此に思慮未だ及ばざるものあるかと自問す、



## 一、象頭山に遊びて生死を觀ず。

察一察し來れば、上來吾が思慮せし所は、此れ未だ眼前に顯出し來れる現象をのみ捕て徒らに區々たりしに因るのみ、蓋し余が思想として深く確信する處あらしめしは嘗て歸郷の途次象頭山に遊びし時にあり山は清雅にして、松代町の上に兀として直立し、頭を回らせば直ちに全町を睥下す可く、長野一体の平地又た眼下にありて、實に幕末の偉人佐久間象山翁の居所なり、時に眼中に映する所町中人馬の來往するの状恰も是れ群蟻の東西に奔走するに似たるを認む。

於是吾れ知れり、嗚呼、叢々たる人類は此れ群蟻のみ、吾れ夏日蟲蟻の孜々として奔走に務むるを見て、其情の憐む可きを思ふ、今ま此蟲蟻の如き蠢々たる人類と、與もに起臥し、與もに樂しみ、與もに學ぶ、其の到底萬

事熄むの死を觀破するなきは宜なり矣、嗚呼、蒼生は憐む可くして語るに足らざるなり、吾れにして儕輩の間に碌々致々として東奔西走、遂に大々の氣概なくむば、此等蟲蟻の人類と等しきのみ、蟲蟻も亦た一寸の蟲に五分の魂あり、故に生を惜むの情あるなり、滔たる人類の生死は蟲蟻の生死と差別なきなり、世人は自から慢じて、傲然萬物の靈なりと稱するは自家の足らざるを示す獨斷なり、其死は此れ蟲蟻と等しきのみ、視よ彼等の終局は、將來永遠の世界に向つて可憐なる一本の石塔を止むるに過ぎざるなり、

噫、吾れは翻然として悟る所あり、夫れ蟲蟻と異なるなきの生死を以て冲天の偉業を畫する余か、腦裡を煩はすは、此れ余の思想未だ小天地に安むざるなり、死即ち肉躰の生死は、又深く思慮を煩はすの値へなきなり、唯だ余が肉躰の生存は、靈妙の快力優腕を保つなり、靈妙の快力優腕



あるか故に、特に余の肉躰なり、其人類たるの肉躰は、余の特色に非ず、即ち此れ余をして人類社會に大事業を遂げ、芳名を擧げ得るの手段を、唯だ天より享けたるのみ、手段既に天より備はれり、吾れ人類界に産まる進ひて余が快腕を振ふ可きなり、遂に余は感慨に堪へず絶呼せり、英雄之事業在睥睨人類於眼下矣

此の象頭山の遊、眼界未だ小なりと雖ども、終に余をして雄心落々たらしめたり、自來好むで大山に登りて、茫々たる眼界をして遮るなからしめ、大河の蕩々たるを俯仰し、志望をして遙かに限なからしめ、大都名邑に到りては、常に高丘に昇りて全市を睥睨し、其の家に在るや、地球儀を友として又た世界的英雄の事業を想像するのみ、蓋し對人的關係を以て世と浮沈するものは、遂に人生の美花を知る能はざるなり、噫、追想すれば、余が受けたる十數年來の教育は、此れ悉く *Passive* ならざる

はなし、如此にして其の何むが爲めなるやを深く悟らず、唯だ同窓の友と學力を角せむとし、他日社會に於けるも、彼等と優劣を争はむとするのみ、争ふて敗に陥るを惡みしのみ、今まにして之れを考ふれば、此の學校的境遇と思想とは、遂に余が將來に對して、腦中に畫きたる天賦の思想と衝突せしなり、衝突は不安を生じ、不安は疑團となれり、蓋し *Passive* の生活は意識なき生活なり、意識なきの教育、意識なきの生活を以て、英雄の事業を想像す、宜乎疑は愈疑に陥れり、噫、既往の生活の如ひば、遂に漂々泛々生死を天に托して、祿々として儕輩と蝸牛頭上の争ひをなして終らむのみ、思ふて此に到らば、此限りある一生を、夢幻の裏に空過せむとは、決而余の思想の許さざる所なり、宜敷一日も速かに、社會的眞理、世界的事實に由り、以て眞正純粹なる人生の大道を發見し、吾が思想に於ける根本の基礎を定め、如此にして將來の生活をして、世界的行動をな



し、二十世紀文明の風潮に、先導者たる可き大道を拾歩す可きなり、然して此の眞理を教ゆるものは夫れ何にか。

### 一、 死は死によりて知るを得ず、

蓋し死果而如此恐る可きか余と雖も徒らに死を畏るゝに非らず、若し死にして唯だに獄問の如き無道にして畏る可きものならむには、直ちに砲聲一發心神を絶滅せむのみ、死の後ちは智覺なきなり、智覺なくむば、畏恐の念なし、死は即意識無きの境なり、余にして前途の希望なくむば直ちに死して智覺を滅盡し、生死憂慮の念を絶むのみ、若し唯だ有形的身体に付きて、尙ほ愛ひあらば道言によりて火葬せむのみ、復た憂ひなし、後は空しく烟なり、或は疾病の終に瘞ゆる能はず、余は既に静寂を欲せば、死は絶對の静寂なり、或は事業蹉跌し、宿望遂ぐる能はずして、林野寺院に安處せむよりも、寧ろ墓中に在るは無上の安處たるべし、余は此に到りては死を畏れず、悔を仰ひて走つて死するも毅然疑はざるな



り、毫も畏れざるなり、此れぞ或は天の命ならむか、

雖然、翻而考ふれば、死豈に如此徒死のみならむや、蓋棺而事定矣、蓋し英雄の死は、逆境に陥りたる最後の成名の門出なり、此事也、克則爲郷不克則烹、固其所也、何害と丈夫一旦去就を決す、事若し成らずして逆境に陥らば、當さに此決心なかるべからず、況むや大義に據りて生死を賭するに致りては、丈夫の最も快とする所なり、

「余が叙爵の榮を得るも、「ウエストミンスター」寺院に葬らるゝも、將さに明日にあり」とは、英將「ネルソン」が「アボークキ」の海戦に臨みて歎呼せし所に非らずや、

彼の一死を賭して名を成すは、亂世に行ふべくして、文明の治世に用ゆるの時機稀れなり、更りに先見の明、此時機の來るの日を算へて、豫め之を利用するの地位に立つは難し、且つ秩序的社會の裏に蹶起して、破天

地の壯を演せむには、豫め飛ばゞ將さに天を衝かむとするの怪力を、徐ろに蓄へざる可からず、故に今更や時勢は、成名の道其れ或は幾分の難きあらむと、又た匹夫の勇、血氣の概は、直ちに用ゆるの處なりとも、世は上に聖明の治を承け、有爲の才を發揮するの版圖、又た舊日の如き踟躕たる日本の小天地に限らざるの時勢は到れり、此時に於きて至大の希望を抱きつゝ、哀む可く、後世の士人に悲まるゝなく、正史に傳へらるゝなく、遂に其名聲の空しく烟滅に歸するものを想はゞ、假ひ身は死するも、神魂安むぞ能く地下に瞑するを得む」

生當雄圖蓋四海

死當芳聲傳千祀

功名非遠有超群

豈喚足爲眞男子

蓋し余にして、功名事業の希望なくむば、又た生死なきなり、功名事業は、余を生死せしむる死活問題なり、故に又自から今日の社會に處して、功



名事業の道を講せざるを得ず、蓋し社會は事物に冷々たり、己れ獨り熱奮するも社會は依然として冷眼なり、然れど冷眼なりと雖ども、又た進歩なきに非らず、熱奮なきに非らず、唯だ英雄の熱奮より見れば進々たるなり、蓋し其進々たるは英雄をして社會に名らしむる所以なり、既に社會を以て立脚の地となす、又た社會の進々たるを惡みて自棄するは、自から英雄たるの思慮に乏しさを自白するのみ、之れを導きてこそ眞の英雄たれ、故に余は眞理と、秩序と、智識とに訴へて、行爲の根本の標準を誤まらざらむと務むるなり、蓋し功名とは余が功德に對して天下後世の奉呈する眞止の名誉の報酬なり、而して死後に於ける名聲は、物体の餘動なり、原動力を離れたるオスシレーションの運動なり、初めより原動力なくむば又た一ツの餘動もなく一ツのエネルギーもなけむ、孔子、子貢に告げて曰く、「君子は世を没して、名の稱せられざるを病む、吾

道行はれずむば、何を以て自から顯はれむ」と、噫、余は到底 Passive の意識なき往生に安むする能はざるなり、余は如何なる事狀に遭遇するも萬世を驚倒し、一大名聲を竹帛に彫れ、後人をして長へに欣慕措く能はざらしむるに非らずむば、到底死を畏るゝの念を去る能はざるなり、如何なる神威のありて、余を守護するも、焉むぞして瞑目するに忍びや、死は萬事熄む所以にして、人生の事業の終局なればなり、

「人間僅か五十年、人生七十古來稀、何か腹のいへる様な事を  
道つて死ねば成佛は出来ぬぞや」



## 一、不知生焉知死、

宿年の暗霧一時に晴れて玉兔忽然として東山の上より顯はれたり

季路問死子曰不知生焉知死

嗚呼、翻然として悟る所あり、曩きに余の死を畏れたるは、未だ以て物理的の死を畏るゝの念と、英雄的事業の終局なる死とを、充分に差別して了解せざりしに因るなり、此二者を調和する能はざりしに由るなり、今まにして此れを調和せしめし所以の道は、實に自から人生の貴ぶ可き靈妙なる怪力ある所以を確認せしに因るなり、蓋し生の尊きを知るは即ち死の眞に畏る可きを、知る所以なり、然も死の眞に畏る可きを知りて、更らに死に處するの決心此に起る、宜乎南洲翁云へるあり、生物皆畏死、人其靈也、當從畏死之中、揀出不畏之理と

余は茲に主觀的の光明を得たり曰く到底 *passively* に死を知る能はざるも、今まや進而 *actively* に即意識有るの境に、死を知るを得たり、此れ眞に死は、英雄の現世的事業の已ぬるの時なることを悟信せり、孔子の所謂生とは物理的生活に非らず、先きに余をして疑念を愈々重ねしめしは、彼の所謂生を以て、物質的生活なりと解せしに由るなり、蓋し孔子の意、生とは人生の妙々靈々なる威大の神力の源泉即生なりとするなり、親よ夫子は其疾重くして死の近きを自から思ふや、嘆而謂へらく、泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎と、丈夫宜らく當さに此の自任ありて後ち、生死眞に知る可きなり、然而聖人を知るものは、少くも聖人と類を同ふする、人物ならざる可らず、宜乎滔々天下の愚眼、後世未儒以來一人の能く識見の此に及ぶなし、實に孔子の教は英雄教なり、英雄の死は生の貴きを知るに非ざれば、明らかになす可きなし、此れ唯一の死に



處する所以なり、彼の生死輪廻、晝夜交代の理を以て、生死を説くに至りては、到底此般の消息を語るに足らざるなり」

凡そ生あれば必らず死あり、生死固と二物なりと雖も、聯連相結ばれて車の兩輪、鳥の双翼の如し、兩者其一を離して、存せしむるを得ざるなり、尙ほ死は内にして生は外の如し、未だ外を見て内を思はずむば、天下の大道を悟らざるなり、故に生を知らむと欲せば、先づ死を知らざる可らず、此れ死は人生の根本的原則にして、行爲の不可振標準なればなり、然も進而死を知らむと欲せば、生を知らざる可からず、死に處するの道は唯だ生の尊きを知り、生の美を發輝して自ら以て安心立命を爲すにあり、此れ生死の以て相離る可からざる所にして、季路既に死の畏るべきを知る、其の未だ悟達する能はざるは、生の尊む可きを知らざるにあり、深く生を知りて、茲に生死の念を悟達し、毅然として疑はざるの決心を

生す、此れ余の識見を以て孔子の本旨に非らざる可からずと解する所なり、敢て云ふ、天下の仁義道德を口にすもの宜しく先づ此決心無かる可らず」

余復た何をか疑はむ、余の念頭今まや生死なし、高く生死の外にあり、何にをか畏れむ、人あり更らに余に悟脱の理を問はば、將さに答へむとす、曰く余は満足の境に存せず、満足にして一點の缺くる所あらずむば、余に於きて死なきなり、肉躰の盡くるは、權兵衛も八兵衛も余と異なるなし、雖然、余は世界に余として且つ萬物の靈長として行働し、自から胸中一點の不満足なくむば、死なきなり、故に余の死に處するの決心は、有死之榮而無生之耻の境に、初めて求め得べきなり、此れ余の絶對の希望なり、安心立命の存する所なり、余の自から生死の外に超脱するなりと信する所以なり、彼の功成り名遂げて死に即くは男子の快とする所な



り、古に云ふ花は櫻木人は武士と武士の花たるは死後の榮にあり櫻花の譽は散るを惜まるゝにあり快男子快起せよ  
嗚呼余を葬むるの紀念碑は世界史なり、宇内は我が功名の版圖なり、現世は我が功名の版圖なり、後世又た然り、惜乎獨り有史以來四千年間の過去をして、余の功徳を仰かしむるなきは殘念、

明治三十年七月二日印刷  
全三十年七月五日發行

定價金拾五錢

著者 花岡金藏  
東京市本郷區本郷東片町百五十二番地

發行者 高頭忠造  
東京市本郷區本郷六丁目五番地

印刷者 北澤久太郎  
同 京橋區和泉町一番地

發行所 哲學書院  
同 本郷區本郷六丁目五番地

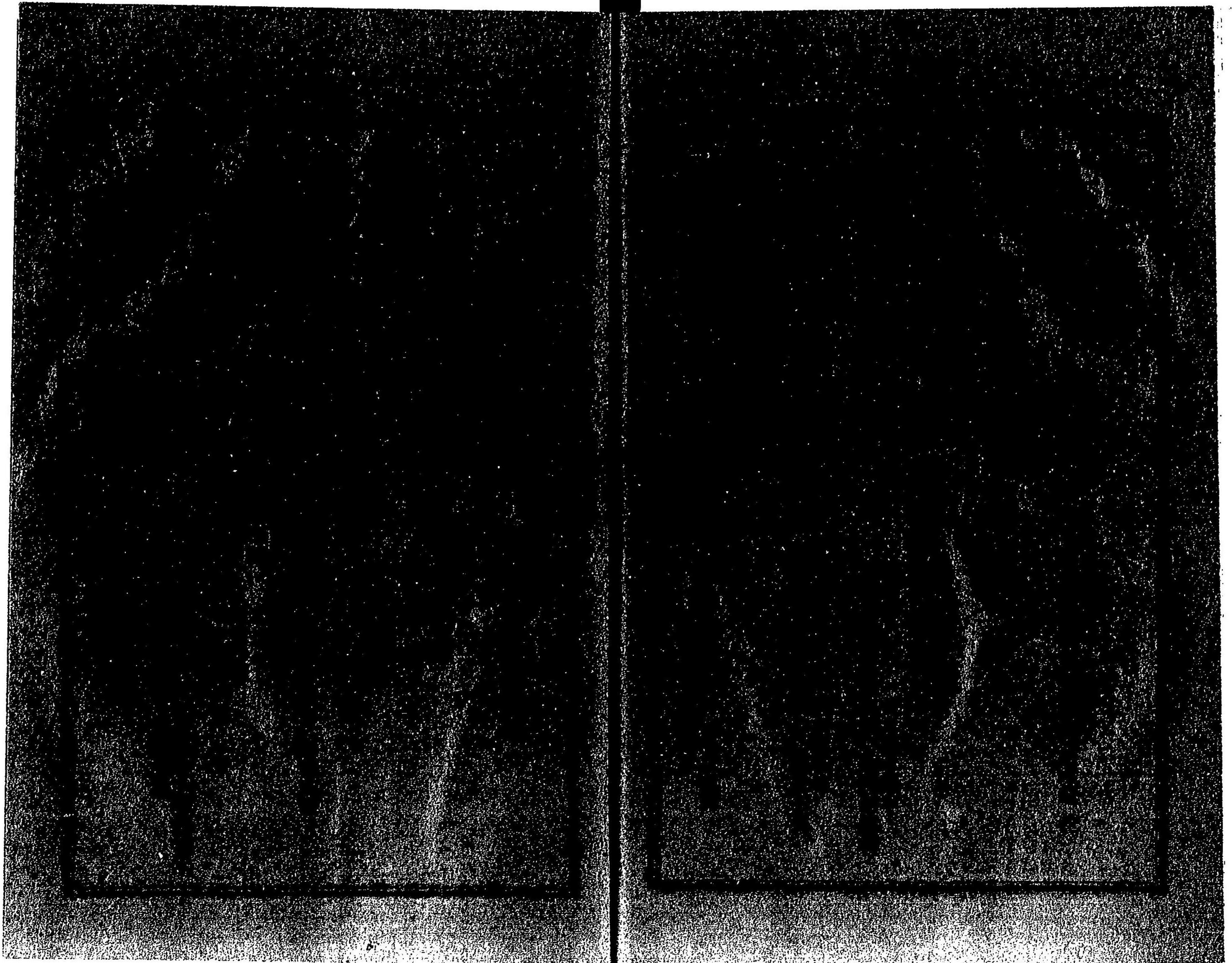




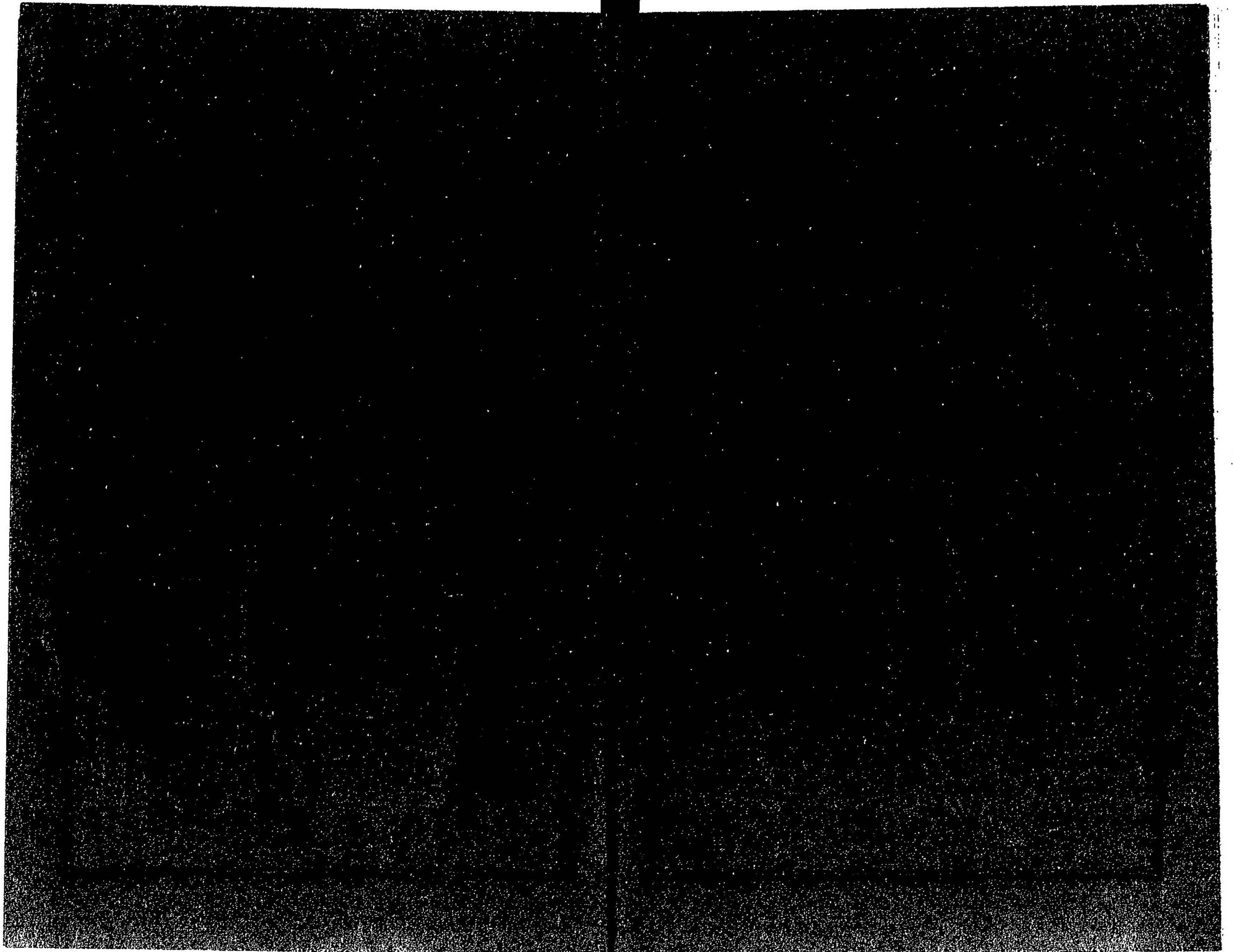








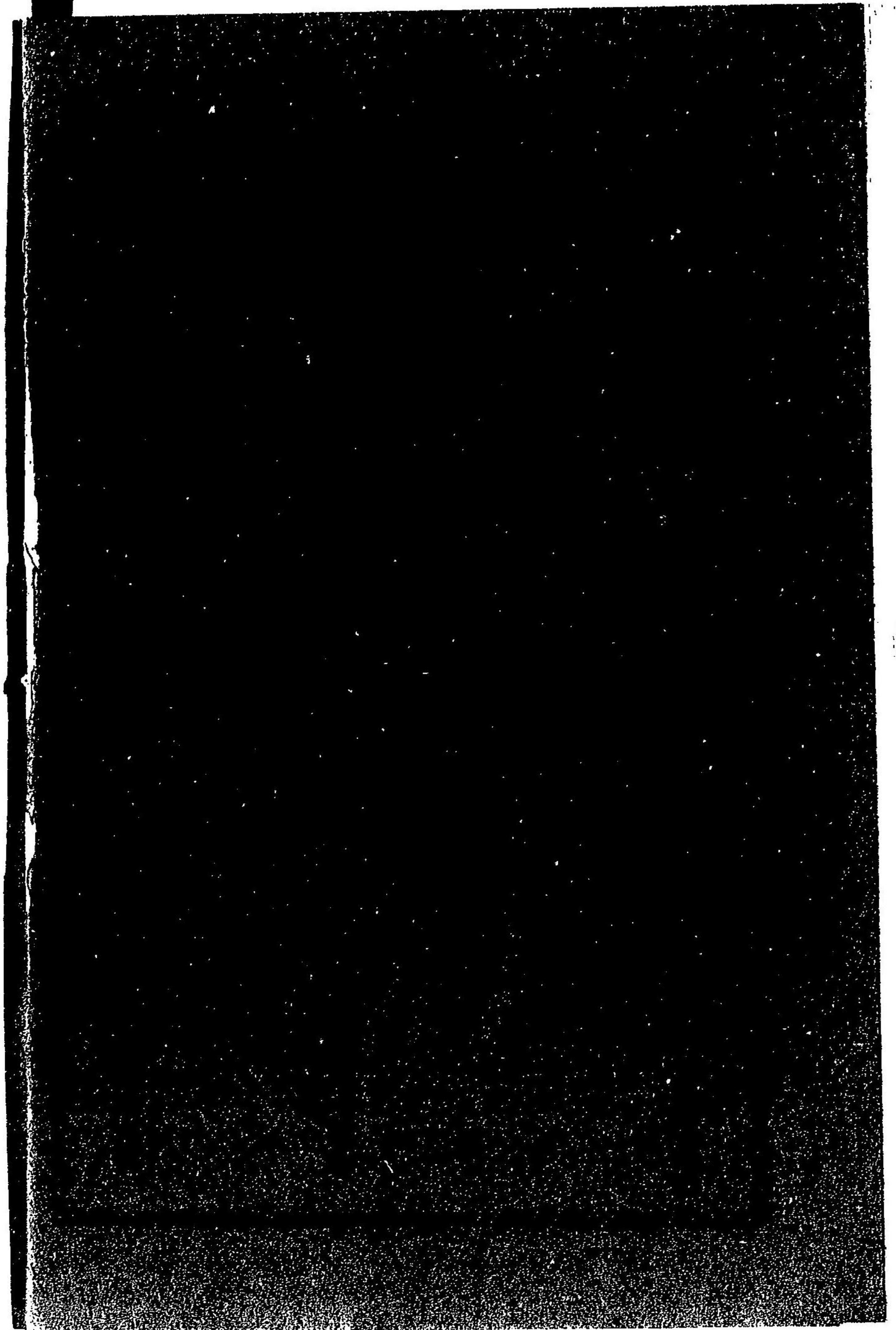




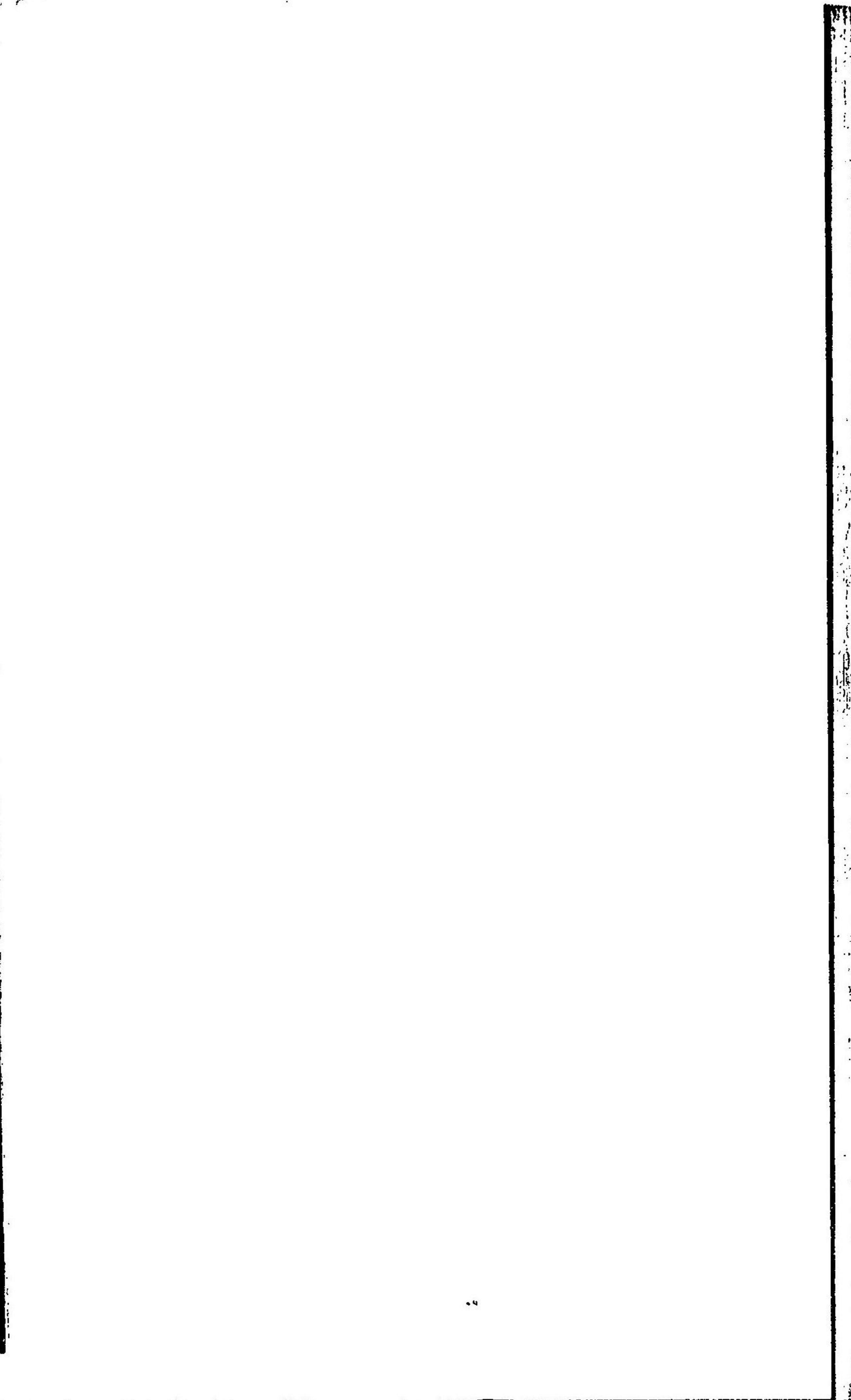
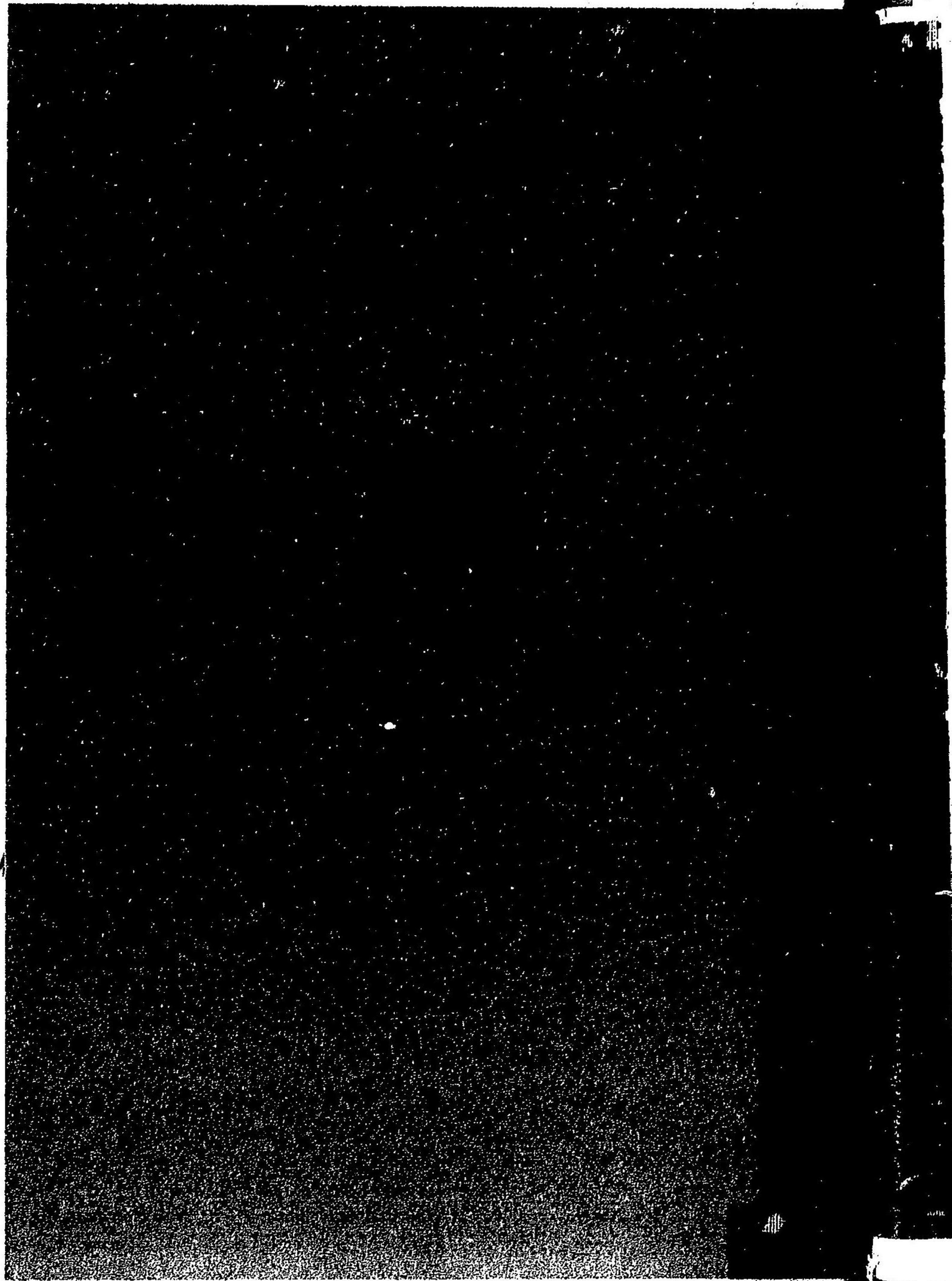


1950











7

6



死

花岡金藏

国立国会図書館

007888-000-2

特47-816

死

花岡 金藏/著

M30

AAA-0058





